北原 弘之（1年） No.1

「嗚呼，おぞましき夏合宿」

☆ 当クラブでは夏合宿というものを毎年恒例で行っていて 今年は北海道へいくという事で 私（北原君）と斉藤君 が アッ班というグループに めでたく加わることになった。

☆ 7月22日の午後何時かに上野駅から北海道へ向けて 急行「八甲田」に乗って出発した。この「八甲田」という列車は大変気が利いた列車で 旅の疲れが出ないように色々な工夫がこらされていて 嬉しいように青森駅につき。アッという間に合宿の出発地である豊富についたのであった。

⋮ 夏合宿

☆ 我々東京工業大学サイクリング部 一同は 様々な思い出 を残し北海道をあとに 一路東京へと戻るのであった。

No.2

とまあ不学生風に書くとこんな所だろうが さて問題の夏合宿自体には全く触れられていない訳で以下この問題に取り組んでみたい。しかしこの問題に触れるには相当のこの準備が必要なので少しづつ話の核心に迫っていきたい。

先ず私(北原君)の考えていた夏合宿とは、それは先輩と後輩との暖かいこころのふれあい、星を見ながらくみかわす酒をして、人生について語り合うとき、そこに熱い絆が生まれる。なんて事は全く考えられない想像を絶する筆舌につくし難いこの世の物とは思えない狂気の集団のくりなす悪の饗宴であろうとは全く世にもおそろしいとまあ支離滅裂な言葉の組み合わせであった。が実際は後半にかたよっていたようにも思える。

夏合宿に関して言えることはいや言いたいことは7回しか夏合宿に参加していないのではっきりした事は言えないが、「これが合宿というものなのか?」

朝5時に起きて食パンとソーセージを食べたすら走り暗くならないうちに目的地に着きテントをはり 夕食の用意、夕食のあとで疲れてすぐ寝て、又朝5時起き。

川場のパチンコ屋では5000円の両替の際6000円をくれるという東京ではとても考えられぬ行為そして根室では帰りの切符を買う際釣銭を10倍もくれ、またまた青函連絡船の中500円の弁当えつで500円という超破格値サービス どれをとっても北海道の人々の私に対する思いやりとしか思えない行為に対し私は感激する次第である。

★ここでサイクリング部としての一年間を振り返ってみよう。

・新歓ラン→この思い出と言えば先ずというよりこれしかないのであるが、幻の逃げイリスト北尾選手 彼の走りぶりは我が目を疑うほど素晴らしかった。

・予備マラソン→ありに書くことでなし。

・予備合宿→疲れた。

思い起こせば数々の忘れられぬ行事を残し1年が終わるのである。途中から書き消した、田中、北尾君に敬意を表してでは、こようなら。 パーペキ パープリン

それの繰り返しである。もっと観光旅行並にリラックスする時間があっても良いと思うのだが…。しかしまあ、これはこれで良いのかもしれてない今後解事みと思う。

今回の合宿で唯一の救いは、当ア班が卑猥さ一色に染まったことである。　ア班のメンバー3年の上原さん、ワク島さん　土井さん、リガベさん2年のホリてん、1年の斉藤君とこれだけのメンバーがそろえば話の内容は当然言わずと知れた方向にいった事もうてなずける。実際土井氏などはあの美しいウグイスの鳴声すらも卑猥な文句と聞き違えるという驚くべき潜在的な能力を発揮したものだ。

とにかく楽しい合宿でした。

私はこの合宿を通して北海道の人々の暖かい思いやり、心の広さ、そしてその人格の素晴らしさをしみじみと思い知らされた。私の合宿における金銭的貧困さを知ってか、人々は「神の手」とも呼べる暖かい手をさしのべてくれたのであった。